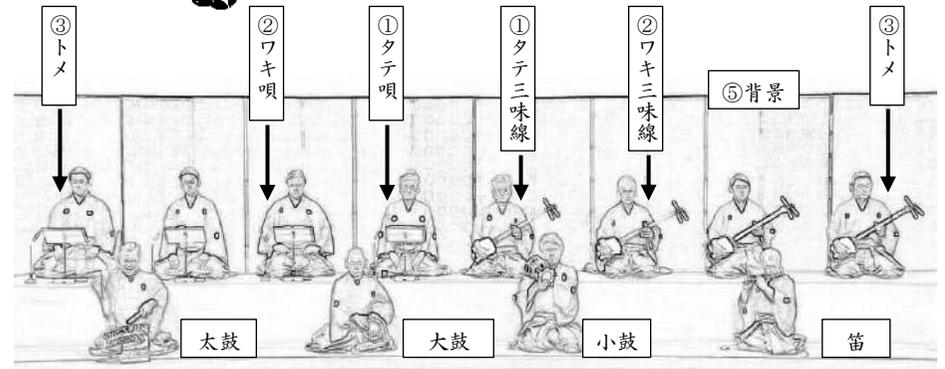


三味線のさわり ろの巻  
演奏形態の基本



長唄では舞台に向かって唄は左側(下手)、三味線は右側(上手)で、三味線と唄とが分業となります。最小単位は、三味線一人、唄一人の「一挺一枚」(唄が一人のことを独吟とも呼びます)で、唄と三味線は同数で一列に並ぶのが一般的です。

- ①タテ：演奏の中心(バンドマスター)となる奏者です。演奏中は、タテ三味線が掛け声などで弾きはじめのきっかけやスピードなどをコントロールしています。
- ②ワキ：タテに次ぐ奏者です。タテのサポート(タテ三味線が弾きそこなったらカバーする)や二枚目以降のリーダーとなります(ワキツレ)
- ③トメ：タテが曲をリードするので、人数が多くなるほど一番遠いトメは、タテの音に耳をかたむけ、しっかり揃えるのが難しくなります。また主旋律に対して別の旋律の「替手」や高音パートの「上調子」を弾くのはトメかタテのみです。
- ④毛氈もうせん：お祝は緋色、変化物や追悼の時は紺色など曲によって色を変へんげものえることがあります。一般的には緋毛氈が使われます。
- ⑤背景：反響板の役割をする屏風がおかれることが多く、一般的には、緋色の毛氈に金屏風、紺色の毛氈には銀屏風を使います。他にも曲によって、クリーム色の和紙の鳥の子屏風や松羽目の背景もあります。

第2回

杵屋喜鶴アカデミー  
寺子屋

日時 二〇二六年二月二十三日(月・祝)  
場所 文化のみち榎木館

第一部 長唄演奏

如月演目 『鞍馬山』 杵屋 喜鶴綾(きねやきかあやめ)  
ふきよせ 『鷺娘』

杵屋喜鶴アカデミー 寺子屋 第二回は『鞍馬山』をご披露いたします。

長唄の『鞍馬山』は源義経(牛若丸)が鞍馬山で修行する様子を描いた勇壮な曲です。本日は、弾き唄いのご披露します。力強い三味線の音色と、物語を語るような歌声をお楽しみください。

第二部 べんぺん寄席

三味線Henry

漫談響演 『壇の浦』

端唄に小唄、琵琶に三線：自由闊達に織りなす邦楽ライブ  
今回は琵琶を中心にお届けします。



段切	本編	序
調子：本調子		
<p>跡を晦まし失せにけり</p>	<p>〱思ひ出せば 我いまだ三歳の時なりしが 母常磐が懐に抱へられ 伏見の里にて宗清が 情によりて命助かり 出家をせよと当山の東光坊に預けられしも 算へてみればひと昔 十余年の星霜経れど 稚心に忘れずして 今まのあたりに見たる夢 それにつけても父の仇 剣道修行なすと雖も 我一向の生兵法 願へば神の恵みにて 本望遂ぐる時節を待たん イデや琢磨の修行をなさん</p>	<p>〱それ月も鞍馬の影うとく 木の葉おどしの小夜あらし ものさわがしや貴船川 天狗倒しのおびただしく 魔界のちまたぞ恐ろしき ここに源家の正統たる 牛若丸は父の仇 平家を一太刀恨みんと 夜毎詣づる多聞天 祈念の疲れ岩角に 暫しまどろむ 肱(ひじ)まくら</p>
<p>跡を晦まし失せにけり</p>	<p>我一向の生兵法：生半可な知識などを身に着けていること。 本望遂ぐる時節を待たん：『義経記』では、鞍馬寺で学問にいそしんでいた牛若のもとを、源氏の遺臣である少進坊が訪れ、牛若の出生の秘密を明かす。自らが源義朝の遺児であること知った牛若は、学問を捨て、平氏打倒の誓いを立てる。</p>	<p>月も鞍馬の：「月も暗し」と「鞍馬」を掛けた表現。木の葉おどし：「木の葉おとし」と同義か。木の葉を吹き落とすもの意で、木枯らし。 天狗倒し：天狗のしわざとされる山中の怪現象の一つ。 多聞天：鞍馬寺の本尊である毘沙門天。四天王の一つ。</p>
<p>跡を晦まし失せにけり</p>	<p>〔牛若丸と小天狗・大天狗(僧正坊)との 剣術修行の様子を表現します。 小太刀を打ち合う音が夜の森に響きわたる迫力を感じてください。〕</p> <p>天狗磔(つぶて)：天狗のしわざとされる山中の怪現象の一つ。</p>	<p>〔牛若丸の出生の秘密と平家打倒を心に誓う強い想いを唄で表現します。〕</p>

長唄 鞍馬山

安政三年(一八五六年)

作詞：三代目 瀬川如臈  
作曲：二代目 杵屋勝三郎

アンケートのお願い



このQRコードを読み込んでアンケートにご協力いただくと幸いです。3分ほどで回答できます。

**段物とは？**  
「鞍馬山」のような曲を「段物(だんもの)」と呼びます。  
段物とは、歌舞伎で演目を「一段」「二段」と区切って数えることに由来する呼び名で、物語性があり、語りを中心に進む構成の曲を指します。  
これに対して、「鶯娘」や「藤娘」など、歌舞伎では所作物と呼びます。

**今回の聴かせどころ**  
長唄は通常、合奏で演奏され、1人で弾き唄いをすることはありません。  
しかし今回は、あえて弾き唄いに挑戦します。  
長唄は分業制の音楽だからこそ、1人で取り組むことで多くの気づきが得られ、合奏の理解も深まります。  
杵屋喜鶴アカデミーでは、このようにさまざまな挑戦を通して、芸を磨いていきます。

**上調子とは？**  
今回三味線はそれぞれ「本手」と「上調子」という異なるパートを弾いています。  
上調子は「かせ」という器具を取り付けて、音程を上げ、装飾的なメロディを奏でます。